

○スルガジョウロウホトトギス (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: A new variety of *Tricyrtis ishiana*.

サガミジョウロウホトトギスが天子岳附近で発見されたことはさきに報告されたが (植物研究雑誌 35: 218, 1960), 採集当時は果実であったため、丹沢山産のものとの比較は充分でできなかった。1960年9月東京の榎本一郎氏のもとで開花したので、丹沢山産のものにくらべたところ、花の形がことなるだけでなく、2, 3の点で区別されることがわかった。丹沢山産の特徴とされる大きな外花被片の距 (図2) は天子岳産では写真 (図1) でみられるように細く小さい。花以外でもいくらかのちがいがみられ、丹沢産は葉の裏面がまったく無毛であるが、天子産はキイジョウロウホトトギスと同様な伏毛が脈上にみられる。丹沢産の包葉は比較的大きく広卵形で先が細長く伸長するが、天子産は小さく狭卵形鋭頭で伸長しない。天子産の花粉袋は赤褐色で丹沢産よりこいようである。この点はキイジョウロウホトトギスやトサジョウロウホトトギスの花粉袋が黄色なのといちじるしくことなる点である。こうしたいくつかの性質が丹沢山産と天子岳産とではことなっているので変種として区別してよいと思う。

サガミジョウロウホトトギスははじめトサジョウロウホトトギスの変種として発表されたが、奥山春季氏は種としてあつかっている。トサジョウロウホトトギスは茎の毛、葉のつきかた、花序、花の形、花粉袋の形や色など種々の点でことなっていて、同一種類とするのは不適當である。サガミジョウロウホトトギス、スルガジョウロウホトトギスはトサジョウロウホトトギスよりキイジョウロウホトトギスに近縁である。前2者は茎の先端、まれに葉のわきから長さ1—2 cmの花軸をのびし、2—3個の花をつけ、花はつばみのときから下垂している。キイジョウロウホトトギスは茎の上部の各葉のわきにできるほとんど無柄の花軸に1個の花をつける。花はつばみのときはうわむきであるが、開くにつれて下垂する (図3)。これら一連の群はいわゆる上種の概念が適用されうる好例であって、種の分化のしかたの一様式をしめすものである。

***Tricyrtis ishiana*** (Kitagawa et Koyama) Ohwi et Okuyama, in Okuyama, Coloured Illustr. Wild Pl. Japan. 6: 164 (1962).

var. ***surugensis*** Yamazaki var. nov.

A typo, foliis subtus ad costam pubescentibus, bracteis minoribus ovato-oblongis acutis non attenuatis in anthesi 3—4 mm longis 2 mm latis in fructu 7—9 mm longis 4 mm latis, calcaribus tepalorum minoribus 2 mm longis 1—1.5 mm latis, antheris atrofusis differt.

Hab. Suruga. circ. Mt. Tensigatake alt. 1200 m (I. Enomoto, Oct. 26, 1959; Typus in Herb. Univ. Tokyo).

(東京大学理学部植物学教室)

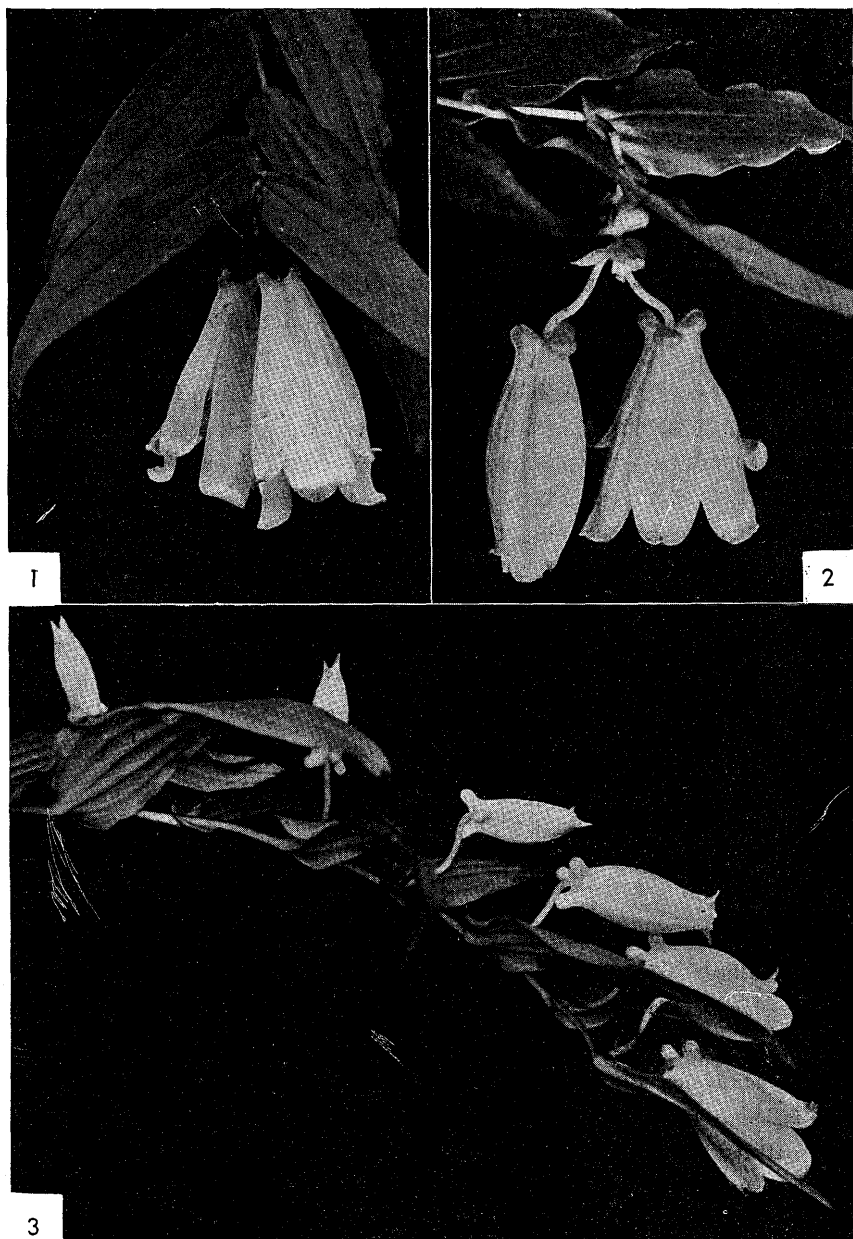


Fig. 1. *Tricyrtis ishiiiana* var. *surugensis*,  $\times 0.6$ . 2. *T. ishiiiana*,  $\times 0.6$ .  
3. *T. macranthopsis*,  $\times 0.4$ .